

「今を生きる」皆さんに、「これからを生きる」皆さんに

校長 沖田浩史

家の作りやうは、夏をむねとすべし。冬は、いかなる所にも住まる。暑きころ、わろき住居は、
堪へ難きことなり。

深き水は、涼しげなし。浅くて流れたる、遥かに涼し。細かなる物を見るに、遣戸は、
よりの間
よりも明し。天井の高きは、冬寒く、燈暗し。(後略) (『徒然草』第55段)

『徒然草』は、今から700年ほど前、鎌倉時代後期に兼好法師によって書かれた随筆ですが、令和に生きる私たちにも、「エアコンが使えないのなら、夏より冬の方がなんとかしのげるな。」とか、「よどんでいる池より、流れている水の方が涼しげだな。」など、自分の感性や心に通じる部分を見つけることができます。

『徒然草』第10段には、「よき人」がのどやかに住んでいる家は、現代風できらびやかではないかもしれないが、差し込んでくる月の光が「ひときはしみじみと見ゆるぞかし」と記されています。どんなに飾り立てても、住居は「仮の宿り」である、という無常観が表れている部分もあり、興味深い内容になっています。

もっと古い時代に書かれた『枕草子』の「春はあけぼの」「うつくしきもの」「すさまじきもの」など、日本人の感性に訴えかけてくる章段は、私たちが共感できる内容になっていますし、一方で、「本当にそうか？」と批判的に読むこともできます。

日本人の感性について述べましたが、今年、中予地区の高校で、茨木のり子の詩「自分の感受性くらい」を教材とする国語の授業を参観しました。全文を紹介します。

ばさばさに乾いてゆく心を 気難しくなってきたのを 苛立つのを 初心消えかかるのを 駄目なことの一切を 自分の感受性くらい	ひとのせいにはするな 友人のせいにはするな 近親のせいにはするな 暮らしのせいにはするな 時代のせいにはするな 自分で守れ	みずから水やりを怠っておいて しなやかさを失ったのはどちらなのか なにもかも下手だったのはわたくし そもそもが ひよわな志にすぎなかった わずかに光る尊厳の放棄 ばかものよ 「自分の感受性くらい」
---	--	---

物事がうまくいかないとき、いらいらしたり、人のせいにしてたりすることは、若者だけでなく、大人にだってあることです。この詩には、私たちに（茨木さん自身に、かもしれませんが）「本当の強さ」を求める力強さがあります。

茨木さんには、戦争に対する怒りや、これからの時代に凜として生きていきたいというメッセージを込めた「わたしが一番きれいだったとき」という詩があります。

「わたしが一番きれいだったとき まわりの人達がたくさん死んだ 工場で 海で 名もない島で」
「男たちは拳手の礼しか知らなくて きれいな眼差しだけを残し皆発っていった」

「わたしが一番きれいだったとき わたしの頭はからっぽで わたしの心はかたくなで 手足ばかりが
栗色に光った」

この詩と、「自分の感受性くらい」という詩を重ねて読んでみると、茨木さんの生き方や訴えたいことが、より深く感じられるかもしれません。「わたしが一番きれいだったとき」は、最後に明るい展望が見える作品です。ぜひ図書館で読んでみてください。

今年には戦後80年の節目の年。私自身も戦争を体験していませんが、いろいろな作品に触れ、紹介することで、今を生きる皆さんに、これからを生きる皆さんに、「生きること」について、そして、「本当の強さ」「本当の賢さ」「本当の正しさ」について、思いをはせてほしいと願っています。